
画像は表象ではない——描写の哲学の新たな展開とデフォルメ

今井慧(東京大学)

私たちは日々多くの視覚的イメージに取り囲まれながら生活している。その中でも、取扱説明書の図解、キャラクターのイラスト、様々な写真など、自分自身とは異なる対象の視覚的な情報を伝えていると見えるもの、すなわち画像 picture について、画像が対象を描写 depict するのがどのようなことであるのかに関する研究が、分析美学における描写の哲学と呼ばれる分野ではなされてきた。美術史家エルンスト・ゴンブリッチの著作『芸術と幻影』における絵画の考察に端を発するこの潮流では、ネルソン・グッドマンのように画像を言語との類比によって特徴づける説や、ロバート・ホプキンスのように対象と画像の類似が描写という働きの鍵であるという見解など、様々な候補が検討されてきた。これらの論者の共通点として、画像とは表象の一種であるという前提がある。画像は、他の表象、例えば言語表象などと並んで表象の一種であり、その中で画像表象だけが持つ表象のシステムを特定することが描写の哲学の任務であるとされてきた。

一方、近年の描写の哲学においては、画像は表象の一種であるというこの前提自体をそもそも疑うという動向が生じてきている。認知科学や神経科学の哲学、知覚の哲学などを専門とする哲学者ロバート・ブリスコーは、画像はそもそも表象の一種ではなく、対象の何らかの側面を代行する機能を持つヴァーチャルなモデルであると主張している (Briscoe 2016, “Depiction, Pictorial Experience, and Vision Science”)。また、『知覚の哲学としての美学』『美学入門』などの著作で知られるベンス・ナナイは、描写の哲学の議論領域成立において重要な役割を果たした哲学者リチャード・ウォルハイムの議論を引き継ぐが、その際、画像を定義するという描写の哲学の従来のプロジェクトを、画像の知覚を定義するという試みに読み替えている (Nanay 2016, *Aesthetics as philosophy of perception*)。ナナイ自身は画像が表象の一種であることを否定するわけではないが、描写の哲学を、表象としての画像の研究から知覚されるものとしての画像の研究へとシフトさせたという意味では、広く反・表象的な立場であると言える。

本発表は、デフォルメされた画像という観点から、画像が本性的に表象であるかどうかという問いに取り組む。ある時期までの描写の哲学が、西洋美術史における写実的な絵画を画像の典型とし、それによって必ずしも写実的ではない画像を拾い損ねてきたという指摘は以前からされており、より包括的な説明の試みがなされている。一方、デフォルメそれ自体をテーマとした研究は少ない(一例として、Bantinaki 2016, “Stylistic deformity and Pictorial Experience”)。本発表はまず、画像が表象でないとしたら何であるのかを明らかにする。そして、デフォルメこそ、表象でないものとしての画像のあり方がよく表れている事例だと論ずる。それにより、画像表象とデフォルメを考える新たな視点が提示されるはずである。